

「文化×地域×デザイン」のありようを、一緒に考えましょう！

文化と地域デザイン学会 第2回大会 参加者募集スタート！

本学会共同代表／文化と地域デザイン研究所代表
松本茂章

2023年5月に設立された異色の学会「文化と地域デザイン学会」では、**2025年4月12日（土曜）**に、第2回大会を開催いたします。「文化×地域×デザイン」に関心のある方なら、どなたでも大歓迎！。**今回初めて、若手による研究報告会の参加者を募ります。**

※2025年4月13日（日曜）、元印刷工場近くの大阪市此花区・夢洲にて、「大阪・関西万博」が開幕します！ 大会参加後、大阪に1泊されて、翌日「EXPO2025」にどうぞ！

【日時】

2025年4月12日（土曜）午前9時30分から午後5時ごろまで

【場所】

アカデミックスペース「本のある工場」（大阪市此花区西九条5-3-10）

（JR大阪環状線・阪神なんば線 「西九条駅」から、北東に徒歩7-8分）

【カンパ代（飲食経費・資料代込み）】

1人 2500円（3月中旬に出版予定の「文化×地域×デザイン」の関連新刊書籍付き）
（すでに購入済みの場合、同書籍の現物を持参されることを条件に1人1000円）

【定員／事前予約制】

40人。申し込みは次の通り。

<https://forms.gle/tZ6ipCgL7W3BbGNfA>

（※もしくは、文化と地域デザイン研究所HP「4月12日欄」に申し込みフォームあり）

【内容】（4つの行事を行います）

- ◆29歳以下による若手の研究報告会（午前9時30分から午前11時50分まで）
（大学学部生、修士課程・博士課程の大学院生、あるいは、その卒業生や修了生ら）
- ◆本学会に関係する研究者・実践実務家らによる全国各地の意欲的な取り組み報告
（午後1時から午後2時まで）
（共著の執筆者らが、自ら展開しているユニークな実践事例を紹介）
（「文化×地域×デザイン」に関する新刊書籍をテキストに用いて）
- ◆4つのグループに分かれた恒例の「ダイアログ」（対話）
（午後2時15分から午後3時45分まで）（4つから2つを選択。45分を2回体験）

◆アットホームな交流会（軽食、飲み物を提供）

（午後 4 時から午後 4 時 30 分すぎまで）

（研究仲間・実践友達との新たな出会いを求めて）（交歓、名刺交換など）

（※終了後、参加者全員で、掃除や後片付けを行います）

◆29 歳以下による若手の調査研究発表・実践報告会

（時間帯は現時点での案）（変更されることも）（※所属は 2025 年 1 月 25 日現在）

	分科会 1(座長:新川達郎)	分科会 2(座長:松本茂章)
午前 9 時 30 分～ 午前 9 時 50 分		◆小峯羽叶（京都市立芸術大学音楽学部 3 年） 「音大生の団体『音符と（おんぷと）』による音楽体験の格差克服の試み」（実践報告）
午前 9 時 50 分～ 午前 10 時 30 分	◆中野慎也（立命館大学経済学研究科 M2 年） 「科学と英国産業革命 一定説の再検討－」	◆関谷洸太 （大阪市立大学文学部 4 年） 「明治前期大阪の学区形成過程－空堀町外 13 ヶ町区を事例として－」
午前 10 時 30 分～ 午前 11 時 10 分	◆福井健吾（静岡文化芸術大学文化政策研究科 M1 年） 「地方都市における伝統芸能の存続 ー石見神楽を支えるステークホルダー」	◆杉岡明日香（同志社大学総合政策科学研究科修了生） 「コミュニティ・デザインを通じた地域づくりに関する研究 ーニカラグア共和国における役割と活用ー」
午前 11 時 10 分～ 午前 11 時 50 分	◆岸朱夏（早稲田大学アジア太平洋研究科 D3 年） 「ドキュメンタリー映画『春告ぐ鳥』における紙媒体の役割」	◆水島愛佳 （東京大学文学部 4 年） 「ふじのくに⇄せかい演劇祭による地域振興」

◆恒例の「ダイアログ」（対話）

毎年恒例の「文化的コモンズづくり」の試みです。4 つの小部屋に分かれ、ひざを突き合わせて、じっくりと論議できる場をつくります。（テーマと信仰者は次の通り）

●「アーティストのキャリアづくり」(福祉的視点から)

司会進行：松岡真弥／フリーのアーツマネジャー・芸術家のキャリアカウンセラー。東京藝術大学卒業後、各地の文化施設・アートプロジェクト等に勤務。現在は京都に移住し

て、大学教員らの仲間とともに発足させた「ケアまねぶ」のメンバーとして活動中。

●「表現の自由を哲学する」(人はなぜ表現をしたいのか?)

司会進行：吉川孝／甲南大学文学部教授（哲学・倫理学）。慶應義塾大学大学院博士課程修了。博士（哲学）。著書『フッサールの倫理学 生き方の探求』にて、若手研究者に贈られる日本倫理学会「和辻賞」を受賞した気鋭の哲学者。高知県立大学時代の調査研究成果をまとめた『ブルーフィルムの哲学 「見てはいけない映画」を見る』（NHK ブックス、2023）を出版。表現の自由について問題提起を行い、話題を集める。

●「公立文化ホールの未来を見つめ直す」

司会進行：山本達也／全国公立文化施設協会事業課長。滋賀県栗東市の文化施設「さきら」の元プロデューサー。東京都豊島区・としま未来文化財団職員を経て現職。各地の文化ホール・芸術祭等を訪ねてリサーチしている。同志社大学大学院後期課程満期退学。

●「歴史まちづくりの将来像」

司会進行：大山僚介／和歌山市観光国際部和歌山城整備企画課職員・学芸員。名古屋大学大学院文学研究科後期課程修了。博士（歴史学）。博士論文は『大正・昭和戦前期の日本における航空思想の普及』（2017）。本学会第1回大会では「和歌山城天守閣の今後の整備 ―復元等の基準と今後の天守閣の役割をめぐって―」を発表した。

※

参加者は、4つのなかから2つの分科会を選び、45分ずつ交代して意見交換します。自己紹介をしたり、自らの活動を報告したりして交流できます。（この時点から、軽食や飲み物を提供する場合があります）グループの希望は、近く掲載する受付フォームで選択。

◆笑顔で話し合う交流会（午後4時から）

主宰者から「軽食」「飲み物」を提供いたします。（おにぎり類、オードブル、ドリンク）
飲食物の差し入れ、大歓迎！（アルコール類もOKといたします）

【主催】文化と地域デザイン学会

【運営】文化と地域デザイン研究所

【運営協力】文化政策・アートマネジメント学生会議

（幹事：中野慎也さん／立命館大学大学院経済学研究科前期課程院生）

(※添付資料)

29 歳以下による若手の調査研究発表・実践報告会／内容

実に多彩で、多様な研究発表・実践報告が集まりました。

先着順で受理いたしました。1月20日に公募して1月26日で締め切りました。わずか6日間で、これほど多彩で多様な研究等が集まるとは。うれしい限り。

国内では、映画製作、演劇祭、伝統芸能、明治の地域史の研究、そして音楽会開催の試みがあります。海外では、中南米のコミュニティ・ミュージアムと英国・産業革命時の草の根科学文化の研究が含まれています。今から、発表・報告が楽しみです！

(※2つの分科会を設定します、であること、。当日、適宜、部屋をお選びください。時間帯によって「1」「2」の分科会を移動することもできます) (席が空いて入れば)

◆水島愛佳 (東京大学文学部4年)

「ふじのくに⇄せかい演劇祭による地域振興」

(東京大学学部卒業論文)

「ふじのくに⇄せかい演劇祭」は、静岡県舞台芸術センター(以下、SPAC)が主催し、毎年4-5月のゴールデンウィーク期間中に静岡市内で開催されている。各国の劇団も参加する国際演劇祭である。その変遷を振り返るとともに、公共劇場であるSPACが、「ふじのくに⇄せかい演劇祭」の開催を通してどのように地域と関わってきたかを考察する。

まずは、SPACの事業全体を振り返り、2007年に行われた、鈴木忠志から宮城聡への芸術総監督の交代に伴い、どのような内容の変化が起こったのかに触れる。続いて、1999年にSPACのオープニング事業「シアター・オリムピクス」の成果継続を目的に始まった「Shizuoka 春の芸術祭」が2011年、「ふじのくに⇄せかい演劇祭」と改名された意図や、その後にもたらされた成果を振り返る。さらに「ふじのくに⇄せかい演劇祭」のフリンジ(自主的)企画である「ストレンジシード静岡」がどんな狙いや経緯で始まったのか、も踏まえながら、「ふじのくに⇄せかい演劇祭」が、いかにしてSPACと地域の関わりを持ったのかを考察する。

◆福井健吾 (公立大学法人静岡文化芸術大学大学院文化政策学研究科修士1年)

「地方都市における伝統芸能の存続 - 石見神楽を支えるステークホルダー」

(本研究は、大学院修士論文の中間報告)

地方都市における伝統芸能の継承は危機に直面している。担い手不足や資金不足などが挙げられる中で、活動継続のためには芸能団体を支えるステークホルダー間の関係性構築が重要だと先行研究で指摘されている。

そこで、本発表では、島根県石見地方で受け継がれてきた石見神楽を事例として、経済的側面に着目し、伝統芸能とそれを支えるステークホルダーとの関係にいかなる特徴がある

のか、を明らかにしたい。これまでの先行研究では、経済的側面については十分に研究されてこなかった。

石見神楽に着目した動機は、地域内外で年間 500 回以上もの公演が行われている実態があるからだ。これほど多くの公演を開催できる背景には、地元企業、観光業者、行政、神社などの多様なステークホルダーとの関わりがある。伝統芸能にとって、ステークホルダーとの密接した関係性こそが、芸能の存続に大きく影響を与えていると考えられる。修士課程 2 年生では、さらに研究テーマを突き詰め、調査範囲の選定と調査方法について詰めの検討を行っていく。

◆関谷洸太（大阪市立大学文学部 4 年）

「明治前期大阪の学区形成過程 —空堀町外 13 ヶ町区を事例として—」

（大阪市立大学学部卒業論文）

「空堀町外 13 ヶ町区」は、現在の大阪市中央区谷町六丁目の周辺を指す。近世において、この地域は身分的に異なる土地の利用が行われ、町人地、武家地、耕作地となっていた。明治維新後に設置された大阪府は、身分別に分かれた土地と民衆を、「町」が基準となる一元的なシステムで把握することを目指した。

一方、大阪府は 1872（明治 5）年に「学区」を設定し、尋常小学校の資金運営を地域住民の裁量で行わせる仕組みを作った。このとき、学区の前提となったのが、「町」を束ねた「連合町」だった。

これらの行政の実務を担ったのが家持の町人たちである。彼らは、大阪府・大阪市・区の行政側と地域住民の間に立ち、調整機能を担った。こうして運営された「連合町」・「学区」が、一つの地域単位として結合していく過程を明らかにする。

空堀のエリアは戦災を免れ、今も往時のまちなみ風景が随所に見られる。本発表の対象は、1894（明治 27）年までに限られるものの、現代大阪の市民社会や文化の前提となった近代の地域社会のありようを見通してみたい。

◆中野慎也（立命館大学大学院経済学研究科修士課程 2 年）

「科学と英国産業革命 —定説の再検討—」

（本研究は、大学院修士論文の中間報告）

科学と英国産業革命を巡っては、特に科学史と経済史において「両者の関係は無かった」という定説が存在する。しかしながら、同時代の発明の中には、ワットが開発した蒸気機関のように一定の科学的認識を必要とするものもある。では、どうして上述したような定説が形成されたのか。また実際のところ、両者の関係はどのようなものだったのか。本報告の目的は、こうした問いに基づいて定説の批判的検討を行うことにある。

本発表に先立って早い段階に両者の関係を実証的に検討したものとして、マッソン&ロビンソン（1969）『産業革命における科学と技術』（邦訳未刊行）がある。なぜこうした先駆

的な研究があったにもかかわらず、定説は根強く存在してきたのか。

それを考えるために、本発表では、まず同書の意義と限界を整理したい。その次に、両者の関係を実証的に検討するために「科学講座」に着目する。当時「実験哲学講座」や「自然哲学講座」と呼ばれた小規模な科学講座は、18世紀を通じて英国の多くの都市で見られるようになっていた。たとえば、同時代を代表する紡績業者の1人であったジョン・ケネディーも、徒弟時代に金銭を払って参加していたことが分かっている。本発表ではそのような科学講座の概観を捉えるために、多くの事例の整理を行う。

この研究は本来、社会経済史の視点で行っているものであるが、「文化×地域×デザイン」学を意識して、地域社会における「草の根的な科学文化」の文脈も踏まえながら、成果を発表したい。

◆杉岡明日香（同志社大学総合政策科学研究科前期課程修了）

「コミュニティ・デザインを通じた地域づくりに関する研究 —ニカラグア共和国における役割と活用—」

（同志社大学に提出した修士論文）

（現在、地域科学研究所コンサルタント）

本研究では、中南米・ニカラグア共和国のコミュニティ・ミュージアム（以下、CM）が担う役割を明らかにし、その理想的な活用方法について考察する。

はじめに、ニカラグア国内の政治体制や文化政策、市民団体の活動を整理し、国内におけるCMの役割を明らかにする。「国民としてのアイデンティティの形成」と「コミュニティ（の一員）としてのアイデンティティの形成」を狙いとしており、前者では文化政策の、後者では市民団体が関与するCMが掲げる役割に注目する。

次に、アンケート調査より、ニカラグアのCMが「経済」、「教育」、「文化」の3領域で活用されることを明らかにしたい。これらは、格差社会を強化する3つの格差（経済の格差、教育の格差、文化の消費の格差）と一致するため、CMが貧困や格差社会を解消もしくは回避し得るといえる。

CMの有効活用には、地域住民のニーズの反映、運営資金の安定的な確保、政府と市民団体の関与の偏りないバランスという要素が求められる。さらに、ニカラグアのCMには市民団体も関与していることから、文化政策がはらむ逆進性の問題を克服し得る点についても考察を行う。

◆小峯羽叶（京都市立芸術大学音楽学部3年）

「音大生の団体『音符と（おんぷと）』による音楽体験の格差克服の試み」

（活動実践報告）

京都市立芸術大学の学生で構成する音楽イベント創造団体「音符と」（代表：小峯羽叶）では、2023年1月の発足以来、京都市内の図書館や商業施設などで、これまで6企画7

公演を実施し、音楽や美術を学ぶ学生ら 48 人が出演してきた。主たる目的は、どのような人々にも、平等に音楽文化を体験する機会を提供することである。本報告ではこれまでの活動等をまとめて報告し、感じ取ったことを伝えたい。同時に、聴衆のみなさんから、企画や実施のありようについて、アドバイスを頂戴できれば幸いである。

◆岸 朱夏 (早稲田大学大学院アジア太平洋研究科後期課 3 年)

「ドキュメンタリー映画『春告ぐ鳥』における紙媒体の役割」

本研究では、発表者が 2023 年 6 月から 2024 年 10 月にかけて撮影・編集・監督を務めたドキュメンタリー映画『春告ぐ鳥』における紙媒体の役割を明らかにする。

発表の前半では、映画制作の経緯を 3 つの時期に分けて説明する。①撮影までの経緯では、発表者が高校 2 年生だった 2016 年 2 月、受験の下見のために京都を訪れた際、被写体である梅染師の方と出会ったことから、2023 年 6 月に撮影を開始するまでを説明する。②撮影中の経緯では、2023 年 6 月から 2024 年 10 月の京都で実際にどのように撮影が行われたかを説明する。③撮影後から上映に至るまでの経緯では、上映会が 2025 年 2 月 28 日から 3 月 2 日にかけて、京都市中京区の映画館「アップリンク京都」で行われるので、上映の進み具合、観客の反応、などの報告を行いたい。

発表の後半では、特に京都での上映に際して、紙媒体のチラシ・ポスターが地域との結びつきにどのように貢献をしたのかを分析する。たとえば、京都市内の映画館、文化施設、撮影に協力してくださった神社・仏閣などに対して、いかにしてチラシ・ポスターを配布し、掲示してもらおうなど、映画上映の宣伝を試みた。

(以上)

※午後からではなく、午前中から、ご参加いただければ幸いに存じます。

若い学生さんたちによる「フレッシュな研究」に接して、ご助言を頂戴いたします。

「7 人」が、お待ちしております！